

性的欲望とは何か？

——現象学と概念分析

魚住洋一

(京都市立芸術大学美術学部)

一九六〇年代後半から、当時のいわゆる「性革命」、あるいは、フェミニズムやゲイ・リベレーションの運動から影響を受けながら、英米の哲学界において、セックスについての哲学的議論がはじまった。そうした議論の先駆けとなったのは、トーマス・ネーゲル「性的倒錯」(一九六八年)、ロバート・ソロモン「セックスのパラダイム」(一九七四年)、アラン・ゴールドマン「ブレイン・セックス」(一九七七年)などである。なかでも、「現代のセックス哲学の幕開けとなった」[Soble 2008b:41]といわれるネーゲルの「性的倒錯」は、サルトルの『存在と無』を手掛かりとしながら、性的欲望についての「現象学的」な記述を行なったものであり、その後、セックスについての哲学的議論を主導したアラン・ソーブルなどがきわめて「概念分析的」な立場に立つのに対し、対照的な議論を展開している。

ここで私が問題にしたいのは、セックスというテーマに関して、売買春やレイプ、ポルノグラフィセクシュアルーといった応用哲学的問題に立ち入るまえに、「性的」とはいったいどういうことか、われわれが行なう行為を「性的」とするものはいったい何なのか、という問いについて、「現象学的記述」と「概念分析」の双方がもつ有効性と限界性を見極めたいということである。

1.

ネーゲルが「性的倒錯」のなかで挙げている話を、議論の糸口としよう。カクテル・ラウンジではじめて出会った一組の男女、ロメオとジュリエットが、ふとしたきっかけで視線を絡み合わせながら、互いに性的興奮(sexual arousal)を掻き立てられていくという話である。その話を、ソーブルによる巧みな要約を参考にしながら、一般化したかたちで整理してみたい。

(1)XがたまたまYの姿を見て、性的に興奮しながら、Yを「感じる」としよう。(2)そして、YもまたXを「感じ」、性的に興奮するとしよう。このとき、互いに見られていることに気づかなければ、二人の興奮は「孤独」なものである。しかし、(3)YがXを「感じて」興奮していることにXが気づき、それを「感じる」ことでさらに興奮し、そしてまた、(4)Yも、XがYを「感じて」興奮していることを「感じる」ことでさらに興奮するならば、新たな展開が「相互的」にはじまることになる。(5)その後、XがYを「感じて」興奮していることを、Yが「感じて」さらに興奮していることを、Xが「感じる」ことでさらにいっそう興奮する、という再帰的なかたちをとって、ネーゲルのいう「レベルが次第に高まっていく相互認知」(the proliferation of levels of mutual awareness)ないし「重層的な相互人格的認知」(multi-level interpersonal awareness)が進行していくことになる。彼によれば、肉体的接触および性交は、こうした視線の交錯の自然な延長にほかならない[Nagel 2008:36ff. [七三ー七六] ; Soble 2008a:83]。

ネーゲルは、性的欲望とは「他者についての感情フィーリングである」と語るとともに、それは「相手を興奮させたいという欲望を相手に認知させることによって、その相手を興奮させたいという欲望である」とも述べているが[Nagel 2008:38 [七七]]、彼が性的関係の基本図式と考えるのは、前の段落で要約したようなものである。彼にとって重要なのは、性的興奮が「孤独」なものにすぎない(1)や(2)ではなく、「相互的」な展開がはじまる(3)以下である。しかしこの図式は、彼自身もそう述べているように、サルトルのいう「二重の相互的受肉」(double incarnation réciproque)のヴァリエーション

にほかならない。サルトルは、たとえば「愛撫」についてこう語っている。「私は他者を誘い込んで、他者自身にとっても私にとっても、オマエは肉体なのだと思感させるために、自分を肉体とするのであって、私の愛撫は、私の肉体が他者にとって他者を肉体として生まれさせるかぎりにおいて、私の肉体を私にとって生まれさせるのである」[Sartre 1948:460 [三七六]]。われわれの身体(corps)が肉体(chair)になるとは、身体がわれわれが「もつ」ものとしての道具性を失ってわれわれで「ある」事実性へと変貌することである。サルトルによれば、性的関係とは、互いの意識をその身体のなか

へと鳥籠とりもちにかかるように埋没させ、そのことによって互いの意識を「所有」しようとする企てであるが、そのためにも自己自身の意識を身体のなかへ埋没させねばならないような、そうした企てなのである。ネーゲルもまた、性的関係において知覚されるのは「その身体に自己自身あるいは他者が従属ないし没入するという現象である」と述べ、この従属ないし没入を示すものとして、勃起など身体の不随意的反応を挙げているが[Nagel 2008:38 [七七]]、ロメオとジュリエットをベッドへと誘いざなうその後の成り行きについては、彼は言葉を濁し視線の交錯についてしか語っていないとしても、二人が互いに性的興奮を増幅しあうその姿は、まさにサルトルのいう「二重の相互的受肉」そのものであろう。

しかし、ここでいう「受肉」という言葉を誤解してはならない。サルトルとネーゲルの双方に共通するのは、性的欲望を「生理的」なものと思ふ考えの否定だからである。たとえばサルトルは、

「われわれは一人の女を欲望するのであって、われわれの満足アンビスマンのみを欲望するのではない」と語っている[Sartre 1948:453 [三六三]]。彼によれば、幼児や去勢者や老人にも性的欲望があることから知られるように、性的欲望とは、生理的な「緊張」の「解消」——たとえば勃起の「処理」としての射精——を目指すようなものではなく、むしろ「対他存在」としてのわれわれのありかたの根本構造をなすような、われわれを超越する他者への欲望なのである¹。他方、ネーゲルにとっても、性的欲望は、生理的な「欲求」(appetite)ではない。彼によれば、それを証拠立てるのは、「レベルが次第に高まっていく相互認知」という性的欲望の重層的なプロセスそのものである。つまり、「生理学的」には説明できない相互人格的なプロセスのこのありかたこそ、「性的相互行為の基本的な心理学的内容」として、現象学的記述を求めるものであることを示唆しているのである²。

ただし、ここで付け加えておきたいのは、性的欲望が「二重の相互的受肉」を目指すものだとしても、サルトルによれば、それはつねに挫折する運命にあるということである。抱きあい愛撫しあう二人の欲望の昂ぶりの果てにおとづれる「快樂」とは、彼によれば、「欲望の死」にほかならない。というのも、セックスのエクスタシーのなかでは、愛撫する快樂は愛撫される快樂に転化し、われわれの意識はもっぱら自己の受肉へと向かって、他者の受肉を忘却してしまうことになり、相互的受肉の企てが破綻してしまうからである。逆にまた、性的欲望が他者を「所有」しようとする欲望であるとしても、まさにそのことによって相互的受肉の企ては破綻する。他者の意識が憑依したこの肉体を所有しようとして、われわれがそれを抱き寄せ、掴まえ、そのなかに入り込もうとすると、われわれの身体は肉体であることを止めて、他者を所有するためのただの道具となり、同時に、

¹ サルトルの「対他存在」の議論については、[魚住 1994]を参照されたい。

² ソーブルもまた、この点に触れながら、ネーゲルのユニークさは、性的欲望のありかたを「本能的」ではない人間固有のものとして解釈しているところにあると述べ、そのことを示すのが、性的意図の相互認知が性的経験の不可欠な構成要素と思ふことだと指摘している[Soble 1980b:8]。

他者の身体もただの対象に成り下がってしまうのである。——乱暴な言い方が許されるなら、互いが同時に主体でありつつ客体であることが可能となるはずであった「二重の相互的受肉」の関係は、一方がもっぱら主体となり他方がもっぱら客体となることで終わりを迎えざるをえない、ということである。サルトルが、性的関係の末路はサディズムかマゾヒズムに行き着くしかない、と語ったのも、そのためであろう。彼にとって、「成功」した性的関係などありえないのである[Sartre 1948:466-469 [三八八—三九三]]。

このようにきわめてペシミスティックなサルトルに比べて、ネーゲルはいささかオプティミスティックである。彼は、サルトルの立場では、性的関係に関して「成功／不成功」、「完全／不完全」という区別をする余地はないと述べながらも³、自らの立場としては、「重層的な相互人格的認知」は現に達成しうるのであり、それゆえ、「相互性」というこの基準を満たす「完全」な性的関係とそれから逸脱した「不完全」な性的関係を区別できることにもなる、と語っている。そして、彼によれば、そうした不完全な性的関係こそ「性的倒錯」(sexual perversion)にほかならないのである[Nagel 2008:36 [七二—七三]]。彼は、倒錯のケースとして、幼児性愛、窺視症、露出狂、サディズム、マゾヒズムなどを列挙しているが、当然のことながら同性愛は、そうした「相互性」を妨げるものではないとして、それらから除外されている。ただし、彼のいう「完全性」(completeness)が規範概念だとしても、そこに「倫理的」評価が含まれていないことは指摘しておかねばならないだろう。

もっとも、「倒錯」についてのネーゲルのこの定義はきわめて微妙なものである。というのも、彼は、倒錯とは個々の「行為」にではなく、^{インクリネーション}気質的なものとしての性的「嗜好」にのみ当て嵌められるものであって、そうした嗜好が生じるには、その因果的条件について述べることはできないとしても、そこには性的展開に歪みを与える何らかの影響が働いている、と語っているからである。しかし、倒錯が個々の行為ではなく、「因果的影響」(causal influences)によって生じる嗜好に関わるとすれば、倒錯は精神医学的な「正常／異常」の問題となり、彼の「倒錯」の議論は根本的に再検討を迫られるのではなからうか [Nagel:2008:32:40 [六四—六五、八一]]⁴。

ところで、ネーゲルにとって性的欲望とはいったい何なのだろう。あらためてこう尋ねてみると、^{エイム}彼がその問いに明確には答えていないことに気づく。ソロモンがいうように、性的欲望がその目標と

^{オブジェクト}対象によって定義されるのであれば[Solomon 1974:337]、さしあたりネーゲルにとって、性的欲望の対象とは「他者」であり、その目標とは「重層的な相互人格的認知」だということになるだろう。しかし、この答では、その欲望を「性的」なものにするものが何なのかがまったく明らかではない。というのも、彼自身も指摘しているように、「重層的な相互人格的認知」は、性的か非性的かを問わず、われわれの相互行為にありがちな一般的図式であり、怒りを互いに昂ぶらせていく「

³ たとえばオークランダーは、サルトルが語るように、性的欲望が挫折する運命にあるとすれば、すべての性的活動は「倒錯的」であることになると結論し、ネーゲルの解釈を批判しているが [Oaklander 1980:200f.]、相互的受肉が実現不可能な理想であるなら、すべての性的活動を「倒錯」と考えても、「倒錯」でないと考えても、あるいは結論は出せないと考えても、結局は同じことではなからうか。

⁴ ちなみに、ネーゲルが「因果的影響」について語ったこの箇所は、一九六九年の初版にはなく、一九七九年の改稿版で加筆されたものである。

ところで、ソープルもまた、人々の性的選好に「歪みを与える影響」について説明せねばならないと語るネーゲルは、この理論的要求が倒錯についてのすべてのモデルを破産させかねないことを認めている、とコメントしている[Nagel 2008:43]。

攻撃的な振る舞い」といった例でも観察されるものだからである[Nagel 2008:38 [七六]]。——ここで思い出したいのは、性的関係において、彼のいう「相互人格的認知」によって「感じ」られるのは、昂ぶっていく互いの「性的興奮」だということである。それは二人が互いの興奮を煽り立てていくということだが、そこではすでにその興奮が「性的」であることが無定義的に語られてしまっており、彼はいわば「論点先取の虚偽」(petito principii)を犯しているとも言えよう。ロメオとジュリエットは、いったい何に興奮しているのだろうか。

さらに厄介なのは、昂ぶっていくこうした興奮が「性的快楽」(sexual pleasure)をもたらすとしても、「快楽とは欲望の死である」というサルトルの言葉を引き合いに出すまでもなく、ネーゲルが、「相互性」を破綻させかねない「快楽」を、性的欲望の目標として考慮の対象としたとはとても思われないからである。にもかかわらず、その一方で彼はこうも語っている。「一般に、性的快楽をもたらす男女間の肉体的接触はどんなものであれ、重層的な相互人格的認知のシステムを可能にする媒体であると思われる」[Nagel 2008:40 [八一]]。——この言葉から読み取られるのは、われわれが「快楽」を求めるからこそ、相互人格的認知が可能になるということであり、彼にしても、性的欲望の目標は「相互人格的認知」ではなくむしろ「快楽」である、と言わざるをえないのではなからうか。彼がこの論文の末尾で次のように語る羽目にもなるのも、おそらくそのためであろう。「セックスと

して最高点をマークするようなセックスが、或る種の倒錯エンジョイメントよりも喜びが少ないということもありうるだろう。そして、喜びがきわめて重要だとすれば、合理的な優先順位を決定する際に、それは性的完全性の考慮を上回るかもしれない」[Nagel 2008:42 [八四]]。この言葉は、「快楽」が人々にとっては性的欲望の目標となりうることを、彼が暗に認めていることを示している。

ネーゲルの叙述のこうした曖昧さから際立ってくる問題とは、「相互人格的認知」が性的関係において進行するありさまを現象学的に記述しながら、同時に、それを「完全性」という概念のもとに規範化しようとしたことにあったかと思われる。ここで浮かび上がってくるのは、「現象学的記述」が「規範化」をいったい果たしうるのか、という疑問であろう。

2.

次に、ソロモンの議論に目を転じたい。というのも、彼はセックスの「コミュニケーション・モデル」を提唱しているのだが、その先駆者として、サルトルとネーゲルの名を挙げてもいるからである。

ソロモンは、性行為(sexual activity)が純粹に「生理的」な快楽を求めるものであるなら、マスターベーションよりも、誰かとするセックスの方がはるかに満足のいくものであるのはなぜなのか、なぜひとは手っ取り早くできるマスターベーションではなく、わざわざ厄介な苦勞までして誰かとセックスをすることを選ぶのか、と問い掛ける。性行為の快楽が「痒みを搔く」ことで得られるような生理的な「緊張」の「解消」にすぎないならば、マスターベーションをするほうがよほど理に叶っているはずだからである。「生理的」なものとしてのオーガズムがセックスの「終り」に来るとして

エンド ゴール も、「終り」を「目的」と勘違いしてはいけない、とも彼は述べている[Solomon 1974:343;1975:276]。

⁵ たとえばソロモンは、ネーゲルのいう「興奮」について、ロメオがジュリエットを見て、好奇心や不安を掻き立てられるだけかもしれないし、彼女に自分が見られることがひどく気になり、狼狽の度を増すだけかもしれないと語り、しかしこれらの態度はどれも特に「性的」なものではないと述べている[Solomon 1974:338]。

彼にとって、セックスとは単なる「欲求」、「動物的本能」ではないのである[Solomon 1975:285]。

このように考えるソロモンが主張するのは、性行為とはそもそも他者たちとコミュニケーションを行なう手段であり、一種のボディ・ランゲージだということである。彼によれば、われわれは性行為を行ないながら、身振りや接触や体の動きによって、優しさや信頼、怒りや憤り、所有欲、優越感や依存心、支配欲や忍従心といったさまざまな感情や態度を互いに伝達しあうのである⁶。そうした相互人格的な感情は、音声言語よりもセックスによってより自然に、より直接的に表現される——いや、セックスこそそうした相互人格的な感情を表現する最上の手段だとさえ、彼は語っているのである[Solomon 1974:343f.;1975:279]⁷。ちなみに、ソロモンによれば、このコミュニケーション・モデルこそ、ネーゲルがロメオとジュリエットという見知らぬ二人の出会いを例に挙げたのはなぜなのか、を理解させるものである。というのも、セックスにおいて同じメッセージを呪文のように何度も繰り返すだけの長年連れ添った夫婦よりも、はじめて出会った二人のほうが、互いに伝えるべきメッセージがはるかに多いからである[Solomon 1974:344]⁸。

性行為が「生理的」な快楽を求めるものであるという考えを斥けるソロモンではあるが、彼は性行為の快楽をまったく否定するわけではない。ただし、彼によれば、性行為が ^{エンジョイメント}喜び をもたらすの

は、その「音声体系」としての身振りによるというよりは、むしろそれが伝える「意味」によるのである。マクルーハンのように「メディアはメッセージである」と考えて、「メディア」と「メッセージ」を取り違えてはならない、と彼は言う。なぜなら、彼によれば、ひとが喜ぶのは、「メディアム」としての細やかな愛撫ではなく、それが伝える「メッセージ」であり、痛みを伴うワギナやアヌスへのインサートでさえ受け入れられることがあるのもそれゆえなのである。こうした言葉から読み取られるのは、彼にとって性行為の快楽とはあくまでも「心理的」なものだということであろう[Solomon 1975:281]⁹。

ところで、ソロモンにとって「倒錯」とはいったい何だろうか。彼は、幼児性愛や獣姦、フェティ

⁶ ソロモンが「性行為こそ相互人格的な感情を表現する最上の手段である」と言いながら、それが表現するこうした感情のなかに「愛」を含めていないことについて、彼は、「愛」は性行為によってうまく表現できず、また性行為においては、不幸なことに、愛の表現よりも、憎しみ、怒り、嫉妬、不安、支配欲、競争心などといった他の感情の表現の方がはるかに強力でより頻繁に見られるからだ、といささか諧謔的に語ってもいる[Solomon 1974:344;1975:276]。

⁷ たとえばソロモンは、「二人の間で体の身振りや接触や動きによって互いの感情を伝達しようとする場合、ほとんどすべての行為がまったく性的なものになりうる」と語っているが[Solomon 1975:283]、プリモラッツは、彼の主張を「ボディ・ランゲージの汎セックス主義」と呼んで揶揄しながら、肩を叩き合って共感を表しあう異性愛者の男たちなど、「性的」ではありえない身体的行為の例を挙げている[Primoratz 1999:39]。

⁸ ソロモンは、ネーゲルの議論に言及しながら、彼もまたコミュニケーション・モデルを受け入れてはいるものの、その彼にとって性行為において伝達されるものは「性的興奮」にすぎず、それでは性行為はあまりにも「無内容」なコミュニケーションになってしまう、と述べている[Solomon 1974:342]。

⁹ ソロモンが、オーガズムはセックスの「終わり」にすぎずその「目的」ではないと述べたのは、人々がオーガズムに達しようとして、そのことばかりに気を奪われるために、セックスによって伝達されるべきことが伝達できなくなってしまうからである。サルトルの提起したモデルはきわめて説得力をもつと彼が語っているのも、そのためであろう[Solomon 1974:343]。

シズムなどを例に挙げながら、それは「コミュニケーションの破綻」にほかならないと語り、むしろそれを「性的誤解」あるいは「性的 インコンパティビリティ 不一致」と呼ぶべきかもしれないとも述べている

[Solomon 1975:282f.]。彼は、倒錯は「倫理的」というよりも「論理的」なカテゴリーに属すると語り、その「規範」的なニュアンスを弱めようとしているが、しかし、プリモラッツも指摘しているように、コミュニケーションの破綻は、性行為だけではなくそれ以外のコミュニケーションにおいても頻繁に起こることであり、それらをすべて「倒錯」と呼ぶならば、この概念はほとんど意味をなさなくなるのではなからうか[Primoratz 1999:54]。ここで少し触れておきたいのは、ひとはなぜマスターベーションよりも誰かとのセックスを選ぶのかと語っていたソロモンが、マスターベーションをどう考えたのかについてである。彼によれば、それはいわば自分に語りかけるモノローグにすぎず、

ディヴィエーション
性的倒錯ではないとしても性的逸脱であり、言いたいことを言うことができない、あるいは、それを言うことを拒む性行為の「自己否定」なのである[Solomon 1975:283]。

こうしたソロモンの議論はさまざまな問題点を含んでいると思われるが、それを明らかにするためにも、ここで、ネーゲルとソロモンの議論をともに批判するジャニス・ムルトンの議論に耳を傾けたい。

ムルトンがこの二人を批判するもっとも大きな理由は、恋の戯れ(flirtation)や誘惑(seduction)が性的行動一般の適切なモデルになりうる、と彼らが見做していることにある。彼女によれば、はじめて出会った二人ならいざ知らず、ほとんどの性的行動はそうした恋の戯れや誘惑を含んでおらず、それらは互いに馴染みあったセックス・パートナー同士の性的行動を特徴づけるものではないのである[Moulton 1976:538]。

彼女によれば、ネーゲルの議論は、「性的予感」(sexual anticipation)の展開として解釈できるものである。恋の戯れや誘惑は、その後にかかることを予感しつつ、心を昂ぶらせながら進行していくものかもしれないが、そうした「性的予感」は「性的満足」と区別しなければならないと彼女は言う。予感の昂ぶりもなしにはじめられた性行為が満足いくものであることもあれば、昂ぶった予感にもかかわらず、不満足に終わる性行為もあるからである。彼女によれば、性的予感がより強く感じられるのは、その後の展開がどうなるか分からない不確かさをもつような、はじめての性的出会いなのかもしれないが、馴染んだパートナーとの間に培われた信頼や経験のほうが、性的満足をより高めてくれることが多いのである。にもかかわらず、ネーゲルは、肉体的相互行為についての基準からの逸脱ではなく、それに先行する性的興奮の不完全さによって「倒錯」を定義するために、親密で満足いく性的行動であっても、それが相互に興奮を昂ぶらせていくことなしにはじめられるならば、彼の解釈では、それは「倒錯」に分類されることになるのではないかとムルトンは疑問を呈している[Moulton 1976:538-540]。

ムルトンのソロモンへの批判はもっと辛辣である。彼女が彼に対して示した疑問や反証例を列挙してみよう。——ソロモンは、さまざまな感情や態度が性的なボディ・ランゲージによって伝達されると述べるが、ただの呻き声や泣き声でさえそれらを同じように伝達できるのではないかと。また、大人と子供の間であれば、「優しさ」や「信頼」をうまく表現する手段は「性的」なものでありえないだろう。セックス・パートナー同士であっても、共同当座預金を作ることのほうが性行為よりも「信頼」を表すよりよい表現かもしれないし、さらに、サド・マゾヒスティックなセックスによって表現されるとソロモンがいう「支配欲」にしても、相手を殴ったり相手から金品を奪ったりする非性的行為のほうが、相手の協力なしに行なえるのだから、それをはるかに直接的に表現できるのではないかと。ソロモンは、長年連れ添った夫婦よりもはじめて出会った二人のほうが性行為によって互いに伝えるべきメッセージが多いと語っているが、見知らぬ二人が出会ったときに交わす会話が浅

薄でステレオ・タイプな「スモール・トーク」であるのと同じように、はじめての肉体的相互行為は性的な「スモール・トーク」にすぎないことが多いのではないかと、等々[Moulton 1976:543f.]。

ムルトンは、このように述べたあと、ソロモンが行なった性的行動と言語とのアナロジーをより適切なかたちで見直すためには、性的行動が感情や態度についての情報を伝達する機能を果たすだけでなく、むしろそれが、言語と同じように、感情や態度を喚び起こす「交話的機能」(phatic function)を果たす点に着目しなければならないと語る。彼女によれば、性的行動において問題なのは、「伝達」される感情ではなくむしろ「産出」される感情であり、性的行動によって相手との間

プロデュース

に共有された親密感が作り出されることなのである。そして、二人の関係をより強固なものにする

インティマシー

そうした親密感は、行きずりの二人よりも馴染みあった二人の間でのほうがより濃密に作り出され、性的快楽もより大きなものとなる、と彼女は述べている[Moulton 1976:544f.]。

3.

ムルトンのネーゲルとソロモンへの批判を要約すれば、ネーゲルに対しては、彼の議論は恋の戯れや誘惑に制限されるべきだということであり、またソロモンに対しては、コミュニケーション・モデルを「交話的機能」によって修正すべきだということである。このことから考えると、彼女のこの両者への批判は彼らの議論を必ずしも全面的に否定するものではない。そこで、ネーゲルとソロモンが提起した問題についてさらに考察を進めるために、彼らとは真っ向から対立する議論を展開しているゴールドマンの「プレイン・セックス」の議論を取り上げてみたい。

ゴールドマンの議論が、ネーゲルやソロモンの議論と対立するというのは、ネーゲルがきわめて「現象学的」であったのに対し、彼が「概念分析的」であることも指摘すべきことだが、それよりも指摘しておきたいのは、彼が「目的-手段分析」(means-end analysis)と名づける分析のありかたを批判の対象としていることである。彼のいう「目的-手段分析」とは、性行為に、生殖、愛の表現、コミュニケーション、相互人格的認知など、性行為そのもの(plain sex)にとって「外的」な目的をネーゲルやソロモンのように設定し、性行為をそれらの「目的」のための「手段」として分析しようとするものことであり、またそれは、そうした目的から逸脱する性行為を「倒錯」と見做そうとするものでもある[Goldman 1977:268f.]。彼によれば、こうした分析が問題を孕んでいるのは、性行為がそれにとって「外的」な目的に結びつけられることによって、「性行為」や「性的欲望」という概念そのものが歪められてしまうからである。

ゴールドマンが、性的欲望とは「他者の身体に触れたいという欲望であり、その接触が生み出す快楽を求める欲望である」と定義し、さらに、性行為とは「行為者がそうした欲望を満たそうとする行為である」と定義したのも、そうした「目的-手段分析」に陥ることなしに性行為そのものを問題としようとしたことである。彼によれば、性的欲望のこの定義は、欲望を「性的」と規定するための必要かつ十分な条件なのである¹⁰。彼はここで、この定義では包括するものが多すぎるのではないかと、あるいは、少なすぎるのではないかと、という反論もありうるかもしれないと述べる。——包括するものが多すぎるというのは、この定義では、たとえばサッカーなどのスポーツでの身体的接触を「性的」と解釈できるかもしれないからである。しかし、彼によれば、これらのスポーツでの欲望の「目標」は、勝利することや練習することであって、身体的接触そのものではありえない。では、乳児を抱きしめたいという親の欲望はどうか。彼によれば、この場合でも、親はまさに

¹⁰ 性的欲望についてのゴールドマンのこの定義は、性器接触を必要条件とするものではない。彼によれば、キスや愛撫などの身体的接触を求める行為は、性的興奮を示す性器の徴候がなくても、それだけで「性的」と規定しうるのである[Goldman 1977:269]。

愛情を示そうとしているだけであって、身体的接触を純粹に求めているわけではないのである。この点について彼は、「身体的接触を求める欲望がなければ、あるいは、接触が他の理由のために求められるときには、その行為は根本的には（性的）とは規定されない」とも述べている¹¹。——他方、この定義では包括するものが少なすぎるという反論としてゴールドマンが挙げるのは、われわれの

欲望を掻き立てるのは、誰かの「身体」ではなくその誰かの「個性」^{パーソナリティ}だということもありうるのではないか、というものである。それを論駁するために彼がもちだすのは、われわれにとって性的魅力をもつのは、その誰かの「思考内容」そのものではなく、その振舞い方に「身体化」されたその誰かの個性ではないか、だから、われわれはその誰かと会話を続けたいだけでなく、それ以上の身体的接触をも欲しているのではないか、ということである[Goldman 1977:268-270]。

ゴールドマンの考えはおおよそ以上で概括したようなものだが、そのように考える彼は、ネーゲルとソロモンをどのように批判したのだろうか。

ソロモンについては、ゴールドマンはこう指摘する。——言語使用において、言語記号そのものは重要性をもたず、それはそれによって伝達されるものの媒体として機能するだけである。セックスを「身振り言語」に還元し、それをコミュニケーションの手段と考えるならば、それ自体として快樂をもたらす肉体的行為としての性行為は、伝達のためのただの「媒体」となり、その本性が見過ごされてしまうことになる。ソロモンは、「言語」ではなく「音楽」とのアナロジーを用いるべきだった

のかもしれない。音楽は、「音素」^{フォネム}そのものの経験が快樂をもたらすような、コミュニケーション

の審美的形式と考えられうるし、誰かに話しかけられることに比べて音楽を聴くことの方が性的経験により近いだろう。しかし、音楽がそれ自体として審美的であり快樂をもたらすものであるかぎり、それを特定の感情を伝達するコミュニケーションの手段としてのみ考えるのでは、それは審美的経験を卑しめることである。それと同じように、セックスをコミュニケーションの手段と考えることもまた、性的経験を貶めることになるのである[Goldman 1977:276]。——ゴールドマンは、これ以外にもムルトンに似た批判を行なっているが、以上に要約したことが、おそらくソロモンへの批判の要点ではないかと思われる。

ネーゲルに対してのゴールドマンの批判は、特にあまりに主知主義的なそのスタンスへ向けられたものである。ゴールドマンは、欲望の相互的認知がセックスの昂ぶりを促すこともあるかもしれないが、相手の貪欲な欲望を認知することでかえって注意散漫になり、身体への没入が妨げられることもしばしばありうると語り、セックスが他者との関係のひとつのありかただとしても、それは「知的」というよりはまずもって「肉体的」なものではないか、と異議を唱えている。彼によれば、ネーゲルのモデルは、セックスそのものよりも、ムルトンも指摘したように、よりソフィスティケートされた誘惑の場面に当て嵌められるべきであるし、またそのモデルに従うなら、それが生み出す快樂に溺れて「相互人格的認知」が忘却されるセックスそのものは、「知的」な前戯と比べても、

¹¹ したがって、ゴールドマンによれば、ソーブルも指摘しているように、金銭のために売春婦が行なうフェラチオは、客にとっては性行為であっても、彼女にとっては性行為ではなく、たとえば「家賃を払い食料を手に入りたい」という欲望を満たす行為なのである[Soble 1996:70:2008b:56]。

ここで注意しておきたいのは、或る行為が事後的にもたらす「性的快樂」ではなく、むしろそうした「性的快樂」を事前的に求める「性的欲望」こそ、ゴールドマンにとって、行為を「性的」なものにする当のものだ、ということである。だから、性的欲望に駆られて行なわれた身体的接触によって、求めていた性的快樂を享受できなかったとしても、その行為が「性的」でなくなるわけではない。

基準を下回る期待外れの結末にすぎなくなってしまうことになる。だから、ネーゲルにとってセックスそのものは、その前戯とは違って、コミュニケーションの手段でさえなく、それ以下のものなのである[Goldman 1977:277f.]。

ところで、ネーゲルやソロモンの考えを「目的—手段分析」に含めるゴールドマンであるが、性行為を、生殖、愛の表現、コミュニケーション、相互人格の認知といった目的のための手段と見做すこうした考えは、彼によれば、プラトン主義的・キリスト教的道徳の伝統に合致するものである。彼はこう語っている。「この伝統によれば、人間の動物的ないし純粋に肉体的な要素は不道徳の源泉

ブレイン・セックス

であり、私が定義した意味での性行為そのものは、この肉体的要素の表現であって、それ自体として非難されるべきものである。これまで検討してきた〔目的—手段〕分析はすべて、こうした性的欲望から距離をとり、それを身体的なものを超えて概念的に拡張しようと試みているように思われる。……性的欲望はわれわれが肉体的存在であり、実際、動物であることを教える。このことこそ、伝統的なプラトンの道徳がこれほど徹底的に性的欲望を非難してきた理由である」[Goldman 1977:279]。——ゴールドマンのこの言葉こそ、ネーゲルとソロモンにとって、もっとも根本的な批判になるかと思われる¹²。

アビタイト

ネーゲルやソロモンとゴールドマンのこの対立は、性的欲望を動物的な「欲求」と見做すか否か、それを「生理的」と見做すか「心理的」と見做すか、という対立であると考えられることもできよう。ゴールドマンにとって、性的欲望は「生理的欲求」であり、人間の「動物的本性」である。だとすれば、ここで思い出されるのは、性行為が純粋に「生理的」な快楽を求めるものであるなら、なぜひとはマスターベーションよりも誰かとするセックスを選ぶのか、というソロモンの問いであろう。性的欲望を生理的欲求と見做すのであれば、その欲求を満たすにはマスターベーションで十分なはずである。たとえばソーブルも、「性的なものが、ゴールドマンの説明にあるように、皮膚を擦り合わせて、そこから生み出される快感を求めることであるとすれば、他者の皮膚の存在は取り除いてもよいことになると思われる」と語っている[Soble 1980b:17f.]。ところがゴールドマンは、すでに引用したように、性的欲望をあくまでも「他者の身体に触れたいという欲望」だと考えるのであり、さらにマスターベーションについては、「窃視症やポルノグラフィの映像を見ることは性行為と規定されるが、それは、それらが現実になされることの想像的代理(an imaginative substitute)である

¹² ソーブルもまた、「ブレイン・セックス」と「目的—手段分析」というゴールドマンの区別にほぼ対応する「還元主義」(reductionism)と「拡張主義」(expansionism)という区別を行なっている。ソーブルによれば、「還元主義」とは、性行為は快楽を感じながら「皮膚を擦り合わせること」(the rubbing of skin against skin)であり、行為が「性的」なものであるためには、それ以上のものを付け加える必要はない、との主張であり、それに対して「拡張主義」とは、「性的」なものを肉体的接触とその快楽のみによって説明しようとするなら何かが見失われるのであり、性行為は「皮膚を擦り合わせる」以上の何ものかである、との主張である。そして、彼もまた、拡張主義は快楽を得るためだけに性行為を行なうことを倫理的な悪だと考えているのではないか、だから、それには肉体的快楽以上の何かが含まれていると主張し、そのことによって性行為を正当化しようとするのではないか、とも述べている[Soble 1980b:7:12]。

ところで話が変わるが、プラトン主義的・キリスト教的道徳の伝統が、性的欲望を「動物的」なものとして見做しそれを非難したからといって、そのことは性的欲望が「動物的」であることの論拠にはならない。にもかかわらず、ゴールドマンは、論証も抜きでこの伝統的な考えをそのまま受け継ぎ、性的欲望を「動物的」と考えるのである。ここには、彼の議論の問題点の一つがあると思われる。

かぎりにおいてである。……パートナーなしのマスターベーションについても、同じことが当て嵌まる」と述べるのである[Goldman 1977:270]。つまり彼は、現実になされる誰かとのセックスの想像的代理であるかぎりにおいてしか、マスターベーションを「性行為」としては認めないのである。また彼は、「性的欲望はその因果的状况から切り離すことができる特定の感覚、肉体的接触以外の仕方¹³で生じうる感覚を求める欲望ではない」とも語っているが[Goldman 1977:268]、この言葉からも明らかのように、彼の考えでは、誰かとのセックスを想像もせずオーガズムの快感のみを求めてなされるマスターベーションは、セックスと「同じ感覚」がそこから得られるとしても、そもそも「性行為」ではないことになってしまう¹³。ソーブルは、こうした彼の主張を、マスターベーションを道徳的に非難するプラトン主義的・キリスト教的道徳の伝統に回帰したものだとして述べ、「ゴールドマンは、自分自身が仕掛けた爆竹によって自爆する。彼の分析は、セックスについての拡張主義 [=「目的-手段分析」] 的な他の説明に対して彼が向けたのとまったく同じ批判に屈服することになる」と語っているが[Soble 1980b:16]、まさにここにこそ、ゴールドマンの主張のもっとも大きな問題点があると思われる。

それでは、ゴールドマンをこのように批判するソーブル自身の考えはどうか。彼は、論文「マスターベーション」(一九八〇年)などのなかで、ゴールドマンの「プレイン・セックス」の考えだと、マスターベーションが「性的」ではないことになるのであれば、「よりプレインなセックス」(plainer sex)の考えを提示しなければならない、と述べている。彼によれば、セックスの分析に関して、行為が誰かとの間でなされることをその行為が「性的」であることの必要条件と見做す「二元的枠組み」(binary framework)、および、それを必要条件とは認めない「一元的枠組み」(unitary framework)という二つのモデルがありうるが、彼自身は「よりプレイン」な「一元的枠組み」の立場に立つと言うのである[Soble 1980a:236f.]。そして彼は、「性的欲望」についてきわめて単純な定義を示そうとする。それは、「性的欲望とは一定の快感(certain pleasurable sensations)を求める欲望のことである」というものである[Soble 1980a:240;1980b:18]。たしかに、このモデルはゴールドマンのものに

比べてもはるかにプレインであり、このモデルであれば、^{オートエロティック}ソーブルが言うように、自体愛的なマスターベーションも真の性行為と認められることになるし、それどころか、二人で行なう性器挿入をも含んだ性行為でさえ、「皮膚を擦り合わせて、そこから生まれる快感を求める」ものとして、一種のマスターベーションだと考えることができるのである[Soble 1980a:237]。

しかし、ソーブル自身認めているように、このモデルの孕む厄介な問題は、われわれが感じる快感のなかで、「性的」と見做しうる感覚を特定することがきわめて困難だということにある。しかも、それを特定できなければ、性的欲望を他の欲望と区別することさえできなくなってしまうのである[Soble 1980b:18]。にもかかわらず彼は、或る快感を「性的」にするものは何かという論点は未解

¹³ 何も想像せずに行なうマスターベーションが「性行為」でないというのは、ソーブルがゴールドマンの議論の論理的帰結として導き出したことであって、ゴールドマン自身は、そうしたマスターベーションは「規範からの逸脱」だと述べるに留まっている。

ところでソーブルは、マスターベーションはセックスの「想像的代理」として「性行為」と認めることができるというゴールドマンの主張に対しても、批判を加えている。——彼によれば、或る行為が別の行為の「代理」であるからといって、それらの行為が同種の行為となるわけではない。ハンバーガーの代りにソイバーガーを食べることは、まったく同じ味がするとしても、ハンバーガーを食べることではないのである。したがってソーブルによれば、ゴールドマンは、誰かとのセックスを想像して行なうものも含めて、すべてのマスターベーションは「性行為」ではないと言うべきだったのである[Soble 1997:70;2008a:82]。

決のままにせざるをえない、と語るに留まっている¹⁴。しかもそれ続けて彼は、このモデルでは、なぜひとは誰かとするセックスを選ぶのかを説明しなければならないが、そのためには、諸個人の快感を求める欲望が、その個人の置かれた環境の社会的条件のなかでどのように精神的・性的(psychosexual)に発達してきたかを問題にせねばならず、そこで依拠しなければならないのは、たとえばフロイト学派の理論であろう、とも述べているのである[Soble 1980a:240]。——しかし、こうした彼の主張は、哲学の「概念分析」が、行為を「性的」にするものは何かという問いに最終的には答えることができず、その問いを精神医学などに委ねなければならない、ということを物語っているのではなからうか。彼は、たとえば「マスターベーションふたたび」(二〇〇八年)においても、「性的欲望のすべての目標、対象、標的、さらには、それを満足させる手段は、研究を必要とする偶然的^{エンピリカル}事実であり」、しかもそれを研究するのは哲学ではなく、「経験的諸学科」であると述べているのである[Soble 2008a:95]¹⁵。

ところで、ソーブルが一元的モデルを唱えたのは、性的欲望を「生理的欲求」と見做すゴールドマンの主張をさらに徹底させるためであったはずである。しかし、性的欲望のありかたを「偶然的事実」であるとする彼のこの主張をよく考えてみると、それもきわめて曖昧なものだということに気づかざるをえない。というのも、この主張のなかには、性的欲望を純粋に人間の「動物的」ないし「生理的」なものに見做し、性的欲望とは何かということの答を「生理学」や「医学」に委ねるべきだということよりも、むしろ性的欲望は「歴史的」ないし「社会的」なものに見做さなければならないという考えが暗に含まれているからである。そのことは、先に引用した「諸個人の快感を求める欲望が、その個人の置かれた環境の社会的条件のなかでどのように精神的・性的に発達してきたかを問題にせねばならない」という言葉からも読み取ることができる。このことをさらに証拠立てるのは、彼が或る箇

14 ちなみに、ソーブルは、性的感覚を特定するものとして三つの定義がありうるかもしれないが、それらの定義はどれも満足いくものではない、とも述べている。

(1)性的感覚とは、性器と密接に関連した性的器官との接触から生み出される感覚である、という定義。——しかし、この定義については、唇や乳首や膝の裏に触れて快感を感じることもあるが、これらが性器と密接に関連しているとはたして言えるのか、という疑問が残る。(2)接触する身体部位がどこであっても、そこから生み出される快感が性的感覚である、というフロイト的定義。——この定義はあまりに広すぎる。というのも、これでは、暑い日に冷水を飲むとき口で感じる快感とオーラル・セックスをするとき感じる快感を区別できないからである。(3)性的感覚とは、他者の身体との接触によって生み出される感覚である、というゴールドマンの定義。——しかし、性的感覚の多くは他者の身体との接触なしに生み出すことができるし、また、そうした感覚をもたずに他者の身体と接触することもできる[Soble 1980a:243]。

これらの定義がいずれも不満足であるとしても、ソーブルがそれらの定義に対して行なった批判も——ここではその理由を述べる余裕はないが——目の粗い、不十分なものだと言えよう。

15 もっとも、このことが語られているのは、ソーブルが彼の一元的モデルの優位性を示そうとした箇所である。彼によれば、ゴールドマンなどの二元的モデルでは、なぜひとは誰かとするセックスを選ぶのか、という性的選好の「原因論」(etiology)が問われることもなく曖昧にされているが、そ

れは、彼らがそうした性行為のありかたを説明を要しない「人間本性」から導き出されるものとして前提しているからであり、だから、彼らにとって説明せねばならないのは、それからの「逸脱」のみだということになるのである。しかし、ソーブルの主張する一元的モデルにおいて前提とされるのは、快感を求める欲望の存在のみであって、われわれが行なう性行為はすべて説明を要するものなのである。ただし彼によれば、その説明を与えてくれるものは、もはや哲学ではない[Soble 2008:94f.]。

所で語っている次のような言葉である。——「セックスについて、今日受け入れられ、信じられ、議論されていることは、二九六年や一八九六年において受け入れられたり……されたこととは異なっている。[それぞれの時代や社会の] 性的とされる振る舞いやセックスについての信念は、セックスとは何かという概念を作り上げるのに寄与するとともに、セックスについての概念の変化からも影響を被るのである」[Soble 1996:137]。——この言葉が語っているのは、それぞれの時代や社会において「性的」として受け入れられたこと、あるいは、その時代や社会のイデオロギーによって「性的」と見做されたことこそが、まさに「性的」だということである。だとすれば、こう主張するソーブルは、皮肉なことに、彼の立場とは正反対だったはずの、ミシェル・フーコーやデヴィッド・ハルペリンの「社会構築主義」(social constructionism)の立場に寝返ったことになるのではなかろうか。それは、ひどく大雑把に言えば、上野千鶴子が語っていた次の言葉に集約されるような立場のことである。——「セクシュアリティとは〈無定義概念〉であり」、セクシュアリティは「人々が〈セクシュアリティ〉と呼び、表象するもの、そしてその名のもとで行為するしかた」にほかならない[上野 1996:6]。

アンチクライマックス

こうした結論は、期待外れの結末かもしれない。しかし、私が行なってきたことは、英米におけるセックスについての哲学的議論がはじまった、その初期の議論がどう展開されたかを辿り直すということにすぎなかった。ただ、そこで二つの立場、「現状学的記述」と「概念分析」の双方がもつ有効性と限界性について、十分語りえたかということについては疑問も残るが、ひとまずここで筆を擱くこととしたい。

参考文献

- Goldman, Alan 1977 "Plain Sex," *Philosophy and Public Affairs*, Vol.6, No.3. Reprinted in: Alan Soble & Nicholas Power(ed.), *The Philosophy of Sex: Contemporary Readings*, 5th edition, Lanham, Rowman & Littlefield, 2008.
- , 1997 "Plain Sex," concise version, Hugh LaFollette(ed.), *Ethics in Practice*, Oxford, Blackwell.
- Jacobsen, Rockney 2006 "Sexual Desire," Alan Soble(ed.), *Sex from Plato to Paglia: A Philosophical Encyclopedia*, Vol.1, Westport & London, Greenwood Press.
- Moulton, Janice 1976 "Sexual Behavior: Another Position," *The Journal of Philosophy*, Vol.73, No.16. Reprinted in: Alan Soble & Nicholas Power(ed.), *The Philosophy of Sex: Contemporary Readings*, 5th edition, Lanham, Rowman & Littlefield, 2008.
- Nagel, Thomas 1969 "Sexual Perversion," *The Journal of Philosophy*, Vol.66, No.1.
- , 2008 "Sexual Perversion," revised version, Alan Soble & Nicholas Power(ed.), *The Philosophy of Sex: Contemporary Readings*, 5th edition, Lanham, Rowman & Littlefield. (First published in: Thomas Nagel, *Moral Questions*, Cambridge, Cambridge University Press, 1979)(「性的倒錯」、『コウモリであるとはどのようなことか』永井均訳、勁草書房、一九八九)
- Oaklander, L. Nathan 1980 "Sartre on Sex," Alan Soble(ed.), *The Philosophy of Sex: Contemporary Readings*, 1st edition, Totowa, Rowman & Littlefield.
- Primoratz, Igor 1999 *Ethics and Sex*, London & New York, Routledge.
- Sartre, Jean-Paul 1948 *L'Être et le Néant*, 24e édition, Paris, Gallimard.(『存在と無』第二分冊、松波信三郎訳、人文書院、一九五八)
- Soble, Alan 1980a "Masturbation," *Pacific Philosophical Quarterly*, Vol.61. Reprinted in: Igor

- Primoratz(ed.), *Human Sexuality*, Aldershot, Dartmouth, 1997.
- , 1980b "An Introduction to the Philosophy of Sex," Alan Soble(ed.), *The Philosophy of Sex: Contemporary Readings*, 1st version, Totowa, Rowman & Littlefield.
- , 1996 *Sexual Investigations*, New York, New York University Press.
- , 2006 "Sexual Activity," Alan Soble(ed.), *Sex from Plato to Paglia: A Philosophical Encyclopedia*, Vol.1, Westport & London, Greenwood Press.
- , 2008a "Masturbation, Again," Alan Soble & Nicholas Power(ed.), *The Philosophy of Sex: Contemporary Readings*, 5th edition, Lanham, Rowman & Littlefield.
- , 2008b *The Philosophy of Sex and Love*, 2nd edition, St.Paul, Paragon House.
- Solomon, Robert 1974 "Sexual Paradigm," *Journal of Philosophy*, Vol.71, No.11. Reprinted in: Igor Primoratz(ed.), *Human Sexuality*, Aldershot, Dartmouth, 1997.
- , 1975 "Sex and Perversion," Robert Baker & Frederick Elliston(ed.), *Philosophy and Sex*, Buffalo, Prometheus Books.
- 上野千鶴子 1996 「セクシュアリティの社会学・序説」、上野千鶴子編『岩波講座 現代社会学10 セクシュアリティの社会学』岩波書店。
- 魚住洋一 1994 「そして誰もいなくなった——コギト・エルゴ・スムの彼方へ」、新田義弘他編『岩波講座 現代思想14 近代／反近代』岩波書店。
- 坂井昭宏 2008 「「性」の哲学的分析——A・ゾーブル『セックスと愛の哲学』第1章を手がかりに」、日本倫理学会第59回大会ワークショップ「性の倫理学の可能性を探る」発表原稿（2008年10月3日、筑波大学）。